

# 文化映画 紹介

渡部実

「森聞き」プロダクション・エイシア作品

「スタッフ」プロデューサー／大兼久由美、小泉修吉  
監督／柴田昌平 撮影／那倉幸一 音楽／Rajaton  
アニメ製作／池田早紀 録音／門倉徹 映像技術／北澤孝司 音効／鈴木利之  
訳詩／上山美保子 題字／財前謙 協力／第7回。森の聞き書き甲子園。実行委員会（林野庁、文部科学省、社団法人国土緑化推進機構、NPO法人共存の森ネットワーク） 出演／長谷川力雄、椎葉クニ子、小林亀清、杉本充、大浦栄二、中山きくの、河合和香、井村健人、他 後援／NPO法人共存の森ネットワーク 助成／文化芸術振興基金 完成／10年 HD作品・125分  
「内容」今回紹介する「森聞き」という謎かけのようなタイトルを持つ作品は、4人の高校生が、それぞれ日本各地の山村に暮らす古老たちを訪ね、その人たちの技（仕事）と人生を見聞、また一緒に体験し、その事を聞き書きするまでの行為を記録した長編記録映画である。

この森聞きについては協力の欄にもある。森の聞き書き甲子園の存在がある。それは日本全国の高校生が「森の名手・名人」を訪ね、知恵や技術、人生そのものを「聞き書き」し、記録する活動を指す。2002年より開始され、これまでに800人ずつの名人と高校生が出会い「聞き書き」の作品が生まれている。発案者である作家の塩野米松氏によれば「中学生にはまだ聞き書きは難しいし、大学生や社会人になってしまふと、それぞれ自分の本業が忙しくなる。就職、進学をまよえに、自分の将来像をあれこれと思い描いている高校生の時期に行うのが、いちばん適していると思つた」（プレス資料より）と語られている。

この映画に登場する。森の名人。は椎葉クニ子さん（焼畑農耕）、長谷川力雄さん（木こり）、小林亀清さん（合掌民家の茅葺き）、杉本充さん（杉の種取り）の4名。一方、高校生も同じく4名。中山きくのさん、大浦栄二さん、河合和香さん、井村健人さんである。取材期間は08年7月〜10年3月である。  
映画は冒頭、まず高校生たちの紹介から始まる。ここでは東京に住む河合和香さん（18歳）の言葉を引用させていた。河合さんは言う。  
「何か、今、この世界というか、地球がこう、何か変わる時期に来ているような気がします。イギリスで産業革命が起きた時も、アフリカで人類が誕生した時みたいに、何か大きな何かに変わる時期に来ているんじゃないかなあと思ひました」  
ここでの河合さんの言葉のうち、イギリスの産業革命、アフリカでの人類の誕生というものは、学んだ知識から生まれたものである。注目してよいと思うのは、それ以外の言葉。「何か『Something』という言葉で河合さんは4回使っていることである。これは言葉、意見としては曖昧である。それではこの河合さん



の言葉を、完全な意味を成していない言葉と捉えるか、それとも、漠然としているが、おそらく聖書に登場する預言者の言葉のような世界をここに感じとるか、そのどちらかを選ぶことでこの映画の見方は変わってくるのではないだろうか。河合さんの言葉は言葉が言葉となり、その言葉が言葉に入り込み、その言葉を言わせているように思われるのだ。

この映画は漠然とした言葉だからその言葉に社会的な意味付けは弱いだろう——とは見ていない。むしろ逆に自然発生的に生まれた一言一言に限りない意味があるのではないか？ と訴えているようだ。この映画には冒頭から言葉に向ける厳肅さがある。

\* \* \*

4人の高校生たちが4人の古老と出会い、農作業や林業を身近に見聞する。最初は古老たちもいつもの仕事場に若いお客さんが来て、気を遣うこともあれば、ご当人も仕事やりにくいこともあったことであろう。映画の構成が人数分に4分割されているので、私は1人の高校生と1人の古老とのエピソードをもっとじっくりと見たかったが、本篇は2時間余り密度の高い時間をもって映画を進めていく。

ある。当然ながらその距離を等しく見定めて両者の立場を尊重して撮影を開始するまでにはとても長い時間が必要である。柴田監督は、高校生たちと古老との取材で彼ら自身から発せられた肉声が生まれるまで、それをひたすら待つ。映画記録の時間が彼等の領域時間になるまで待つ。

それは柴田監督ならではの手法である。監督第1作「ひめゆり」(07年/1483号掲載)でのひめゆり部隊の生存者への取材はそのような監督の姿勢から生まれたものではなかったか。「森聞き」は「ひめゆり」で実践された経験者の言葉を監督自身が聞き役となつて描く手法とは異なり、森の古老が高校生と一緒にいることによって今回は高校生が古老の経験談を聞き出している。それは質疑応答といった堅苦しいものではなく、両者が充分なコミュニケーションを育んだ結果、自然と口から出る会話になっている。そこに清々しさを感じる。

映画はラスト近くに椎葉クニ子さんと中山きくのさん(16歳)とのエピソードを紹介する。ここで椎葉さんは、すこし形式的な質問をする中山さんの質問に答えるよりも、もっと広い意味での生き方を語る。その諸々の意見を聞いている中山さんは、ただ聞いているか、思いついたことをその場で短く話すという応対に終始する。映画は受け身の中山さんの表情をひたすら撮っている。

おそらく今までの記録映画や劇映画はカメラを向けられた被写体の人たちが、カメラの存在を意識して何かをしゃべらなければいけないという緊張感があったことだろう。しかしこの映画は中山さんが古老の話の聞いて、漫然と宙を見ている顔の表情を一途に撮っている。中山さんは言葉を留保したまま沈黙を保っているようにも見える。ここにも不思議な美しさがある。すなわち今までの映画はどのようにやらずれば明確な意味を示さないと思われ

るこのような映像を、価値が無いと判断してカットしてきたのではなかったか。しかしこの映画は、実にそのような中山さんの何を思っているかは知れない、よってそこに意味を確定できない、とされる彼女の表情を、彼女自身の。時間。として素直に撮っている。私はこの場面を見て、このような場面にこそ、実は何か奥深い世界の意味が隠されているのではないだろうか？ と思わず感動せざるを得なかった。この中山さんの表情は冒頭の「何か世界は変わり始めている」という河合さんの問いかけに映像をもって響き合っているように思われたからだ。

私はこの映画に登場した他の森の名人たちのエピソードも含めて、世界はどこかでつながっているということを改めて実感した。森聞き」は来春、公開予定。(問合せ先)プロダクション・エイシアTEL042-49716975、FAX042-49716976)